

指導資料



鹿児島県総合教育センター

令和元年10月発行

国語 第148号

対象

中学校 義務教育学校

校種

特別支援学校

キキは四回宙返りをするべきか、やめるべきか!?

— 評価問題を活用し、根拠を明確にして自分の考えを書く力の定着を図る中学校国語科の授業改善 —

国語科の学習指導を通して身に付けた資質・能力を的確に評価することは、教師にとって指導の改善につながるとともに、生徒にとって学習を振り返り、次の学びに向かう手がかりとなる。そこで、評価問題を活用し、根拠を明確にして自分の考えを書く力の定着を図った中学校国語科の授業改善の進め方を提案する。

【「空中ブランコ乗りのキキ」（三省堂中学校1年 作者 別役 実）のあらすじ】

空中ブランコで三回宙返りをしているキキはサーカスの人気者。けれど、キキは、いつも不安な気持ちを抱えている。いつか誰かが三回宙返りを成功したら、自分の価値がなくなることが心配で、キキは休みの日は四回宙返りにチャレンジしている。けれど練習でも一度も成功したことがない。すると、ある日、金星サーカスのピピが三回宙返りをしたという知らせをキキが耳にした。練習で一度も成功したことがないまま、キキは四回宙返りにチャレンジする決意をする。キキの前に現れたおばあさんからもらった薬を飲んで四回転宙返りにチャレンジするキキ。そして、四回宙返りを見事成功させるが、キキの姿はすでになく、翌朝、サーカスのテントに大きな白い鳥が一羽とまっていた。



1 はじめに

本年度の全国学力・学習状況調査の結果から、国語科の課題の一つに「文章の構成や展開、表現の仕方について、自分の考えをもつこと」が挙げられている。このような課題に対応するためには、育成すべき資質・能力を明確にし、国語科の指導を通してその資質・能力がどの程度定着したのかを的確に評価するための授業改善が一層求められている。そこで、国語科の資質・能力の育成を目指し、評価問題を活用しながら、根拠を明確にして自分の考えを書く力の確実な定着を図った中学校国語科の授業改善の進め方について提案する。

2 「考えの形成」に関する指導の充実

今、国語科の学習において、実生活に生きて働く確かな国語の能力を確実に身に付けさせるために「考えの形成」を図る指導の充実が求められ、学習指導要領に示す全ての領域の指導事項に「考えの形成」が位置付けられることになった。そこで、今回は「考えの形成」を図るために根拠を明確にして意見文を書く言語活動を位置付けた実践事例と評価問題の活用の仕方を紹介する。

本事例は、空中ブランコに乗るサーカスの人気者キキが、一度も成功したことがない「四回宙返りに挑戦するべきか、やめるべきか。」について描いた文学的文章を読み、自分の考えを伝える意見文を書く学習の単元である。根拠を明確にして書く力の定着を図るために、意見文を推敲する際に、指導計画の展開部分に評価問題を位置付けて指導の充実を図ることにした。

2 「学習指導」と「学習評価」の一体化

学習評価を行うことの意義は、教師の指導改善につながると同時に生徒にとって学習改善につながることである。評価問題の活用についても考え方は同一である。学期末や学年末に総括的に評価し、評定を付ける目的のためだけにペーパーテストによる評価問題を活用するのではなく、生徒に身に付けさせたい資質・能力を補充したり、定着を図ったりするために更に活用の仕方を工夫するべきである。例えば、単元の導入で評価問題を活用すると既習事項の定着状況を診断することができるし、また、単元の展開や終末で評価問題を活用すると学習内容の定着の状況を把握することもできる。生徒の視点から捉えれば、当該単元で必要な資質・能力はどのような力であるのか、身に付けた力をどのように発揮すればよいのか単元の学習内容と関連付けることができるようになる。

3 根拠を明確にして自分の考えを書く（意見文）単元に評価問題を位置付けた指導計画の例

以下、単元の展開部分に評価問題を位置付け、学習内容の定着を図る指導計画の例を示す。

選	学 習 活 動	単	指 導 ・ 援 助 の 留 意 点
導	1 見通しをもち、学習の進め方を理解し、単元を通じて身に付けるべき力を明確にする。	1	学習目標を示し、学習の動機付けを行う。
入	「空中ブランコ乗りのキキ」の生き方について、他の登場人物と比較しながら自分の考えを明確にして、意見文を交流しよう。		
展	2 自分の考えを明確にした意見文を書くために、登場人物の心情や行動の変化や生き方を捉えさせる。 3 主人公キキの生き方について考え、自分の考えや気持ちを根拠を明確にして、意見文をまとめる。	2 1	- 生徒が、文章中の表現を手掛かりにして意見文を書くために必要な言葉を、根拠と明瞭に捉えさせる。 - キキの生き方について、自分の考えを明確に伝える意見文を200字程度で書かせる。
開	4 評価問題の活用 「カラー柔道着の着用」に関する投稿Aと投稿Bの意見文を比較しながら評価問題に取り組む。	1	意見文のテーマ キキは 四回宙返りをすべきか やめるべきか - 互いの考えを交流し共有を図る。 - 評価問題を通して、考えを支える根拠との関係を見付けさせ推察の観点とする。
終	5 評価問題を通して、意見文の見直しを行い推敲（補足・修正）する。 自分の立場を明確にして意見文を書くには、どのように書けばいいかな	1	設定を通して意見文を推敲する際の観点を見付けさせる。 観点① 文章の構成の仕方 観点② 接続語の使い方 観点③ 引用の方法や効果 観点④ 反論への想定
末	6 四回宙返りをして姿を消したキキと白い鳥について考え、キキの生き方に対する自分の考えをまとめる。		物語を読みながら、人間や社会、生き方に対する自分の考えを深めさせる。

（領域：「読むこと」「書くこと」）
 （言語活動：「意見文を書く」）
 (1)単元名 自分をみつめる
 『空中ブランコ乗りのキキ』を読み、他の登場人物と比較しながらキキの生き方について、自分の考えを書く。
 (2)単元の目標

・キキの心情の変化や生き方を捉えながら、人間や社会、生き方に対する自分の考え方を広げたり、深めたりすることができる。
 (C 読むこと)

・「キキは四回宙返りをすべきか、やめるべきか」について、自分の考えを根拠を明確にして書くことができる。(B 書くこと)

・意見と根拠との関係に注意し、文章の構成や展開を考えて説得力のある意見文を書くことができる。(B 書くこと)

意見文を書くときに必要となる書く力を評価問題を通して補充し、本単元の言語活動の実現に生かせるようにする。

意見文のモデル

私は、キキは四回宙返りをすべきだと思います。なぜなら、キキは単に人々の拍手や人気のためだけで跳ぶわけではないと考えるからです。
 また、誰もできない宙返りをするのはキキにとって生きがいであり、自分の存在や価値を実感することだからです。
 もしも、ここで四回宙返りに挑まなければ、本来の自分の姿を見失い、キキはこれから先もずっと後悔をして苦しむことになるでしょう。
 だから、一回限りでも私は跳ぶべきだと思います。

中学校1年『空中ブランコ乗りのキキ』単元指導計画例(全6時間)

4 根拠を明確にして自分の考えを書く（意見文）単元に位置付けた評価問題の例

問 柔道の国際試合でカラーの柔道着を着用することについて、自分の考えを述べた投稿Aと投稿Bの意見文を読んで、次の各問いに答えなさい。

一 投稿Bは、線部のように反論する相手の考えを踏まえ、取り入れることを何というか。このように、自分の意見に相手の考えを取り入れる文章構成の仕方として適切なものを、次のアからウの中から一つ選び、記号で答えよ。

二 投稿Bの文章構成の仕方として適切なものを、次のアからウの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 頭括法 イ 尾括法 ウ 双括法

三 投稿Aに反論するために、調べたことを反論メモの①と②にまとめた。このメモを使い、後の条件に従って、投稿Bの根拠・理由の部分を作成させよ。

（条件）

① 反論メモの①または②の内容のいずれかを根拠にして書くこと

② 六十文字以上、八十文字以下で書くこと。

③ 二文以上で書くこと。

投稿稿A

カラー柔道着の着用を考える！

柔道の国際試合で様々なカラー柔道着が使用されるようになってきた。このカラー柔道着の着用に対して、「柔道の伝統が崩壊する。」と反対している人がいる。しかし、私は伝統が壊れるとは考えていない。

例えば、日本古来の格

技である相撲と比較してみるとよい。かつては黒や紺だったまわしの色が今はカラフルになっていいる。外国人力士も増え、まわしの色がどんなにカラフルになってもその伝統はいささかも損なわれていない。

だから、同様に、柔道の国際化が進み、たとえ柔道着の色が変わっても、柔道の伝統が壊れることなどはあり得ないと私は考えている。

① 相撲と柔道の違い
（相撲）
現在の相撲は、江戸時代の勸進相撲の延長にある。もともと興業として発達した。観客を喜ばせるためにさまざまな工夫してきた。

（柔道）
柔道は、武道である。観客に対して見栄えをよくすることは、伝統にはない。



投稿稿B

カラー柔道着の着用を考える！

わたしは、Aさんの意見に反対である。

Aさんは、「柔道着の色が変わっても、柔道の伝統が壊れるとは考えていない。」として、次のように述べている。「日本古来の格技である相撲では、かつては黒や紺だったまわしの色が今はカラフルになっていいる。外国人力士も増え、まわしの色がどんなにカラフルになってもその伝統はいささかも損なわれていない。」と。しかし、わたしは、この考えに疑問を持っている。

根拠・理由

だから、私は、たとえ柔道着の色が変わっても、柔道の伝統が壊れることなどはないと断言することは問題であると考えている。

② まわしと柔道着の色の違い
（相撲）
まわしには、本来定まった色がない。
（幕下以下のまわしは、黒か紺、十両以上のけいこまわしは白と決まっている。）

（柔道）
柔道着は、白と定められていた。
「清浄さ」のような象徴的な意味ももたされている。



反論メモ①

現在の相撲は、江戸時代の勸進相撲の延長にある。もともと興業として発達した。観客を喜ばせるためにさまざまな工夫してきた。

反論メモ②

まわしには、本来定まった色がない。
（幕下以下のまわしは、黒か紺、十両以上のけいこまわしは白と決まっている。）

【この問題を使って身に付けさせる意見文の書き方】

- ① 自分の考え（立場）を明確にして結論を繰り返す。
- ② 相手の考え（反論）を想定して自分の考えを述べる。
- ③ 段落を設けて、自分の考えを述べる。（5文程度）

各設問の解答例とねらい

◆ 問1の解答例 引用

「知識及び技能」の（2）情報の扱い方に関する事項
情報の整理のイ
比較や分類、関係付けなどの情報の整理の仕方、引用の仕方や出典の示し方について理解を深め、それらを使うこと。

◆ 問2 解答例 ウ

「知識及び技能」の（2）情報の扱い方に関する事項
情報と情報の関係に関する事項
原因と結果、意見と根拠など情報と情報との関係について理解すること。

◆ 問3 解答例

相撲は、江戸時代の勸進相撲の延長にあり、興業として発達したものであるが、柔道は武道である。また、武道には、観客に見栄えをよくするという伝統はないのである。（77字）

「思考力、判断力、表現力等」のB書くことのイ
書く内容の中心が明確になるように、段落の役割などを意識して文章の構成や展開を考えること。

5 評価問題を活用後に推敲し、身に付けた力を発揮して言語活動を実現した生徒の意見文

次は、同じ生徒がテーマ「キキは四回宙返りをするべきか、やめるべきか」について記述した意見文である。二つの意見文を推敲する前と後で比較すると、評価問題を通して補充した書く力を発揮して、根拠を明確にし、文章構成を整えた意見文を書けるようになった姿を見取ることができる。

推敲前の意見文

キキは4回宙返りを
すべきか、やめるべきか

推敲のポイントを書いて意識している。

（最低1個）

相手の意見へ
価値観は、一度しかない人生だから、
命は大切なものだけではない。
一度しかない人生だからこそ、
自分か後悔しない人生、
生き方をしたいと思う。

少しの間
だけでもいい。

意見と根拠や理由の関係が明確になり、反論を想定し、文章構成を整えて記述した生徒の意見文

私は考えます。

白くなく、キキは四回宙返りをするべきだと
ことに恐れてしまっているからです。

人生だから、自分が後悔しないようにする
ことが一番だと思っております。

もとのままです。確かに、一つの命は大切な
瞬間であって、大きな満足感を得ることができ
ち、存在価値を味わうことは、たった一
瞬です。

キキは四回宙返りをするべきだと
私は考えます。

双括型の構成

反論を想定

接続詞の使い方

【推敲前の意見文】 → 【推敲後に書き直した意見文】

6 評価問題の工夫・活用と目的やねらいの共有

生徒が身に付けた資質・能力を的確に把握するためには、国語科の特質や評価の観点、ねらいに応じて多様な評価方法の導入や工夫が求められる。もちろん、評価問題はあくまでも評価方法の一つであり、測定できるのは学力の特定の一部であることには留意しなければならない。しかし、従前、学期末や単元末に行われていた知識や技能の再生に偏りがちであったペーパーテストの評価問題には改善の余地があるし、評価問題の活用の工夫すれば授業改善を図ることも可能であることに留意すべきである。今後、評価問題の中に、例えば、「知識・技能」の観点については、言語についての事実的な知識の習得を問う問題だけではなく、概念的な理解を問う問題の導入も求められる。また、「思考・判断・表現」の観点については、全国学力・学習状況調査で示されている知識とその活用を一体的に問うような評価問題の開発も求められる。具体的には、日常生活や社会生活の場面を想定した評価問題の工夫である。国語科においては、身近にある新聞やポスターを題材にした問題や話し合いや討論、インタビュー等の言語活動の場面を取り上げた評価問題を意図的、計画的に活用する必要がある。また、このように評価問題を活用する時やその結果をフィードバックする時には、観点別学習状況の評価のどの観点について、どのような国語科の資質・能力を評価するための問題であるかについて、その目的やねらいを生徒と共有することも大切である。評価問題の目的やねらいを共有することは、生徒にとって学びの意義や価値が明確になり、自らの学習の調整を図る契機につながることも期待されている。さらに、知識とその活用を一体的に問うような評価問題を活用する際、その全てを自作問題で対応することは容易なことではない。そこで、鹿児島学習定着度調査でこれまでに出版された活用に関する評価問題や、「かごしま学力向上支援Webシステム」に掲載されている評価問題を学習内容に応じて活用することも対応策の一つである。今後、評価問題の多様な活用方法を工夫することにより、中学校国語科の授業改善とともに生徒の学習改善が進み、国語科の資質・能力の育成につながることを期待している。

－引用・参考文献－

- 文部科学省『中学校学習指導要領解説国語編』平成29年
- 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 児童生徒の学習評価に関するワーキンググループ資料 平成29年12月
- 鹿児島県総合教育センター 『指導資料1961号(国語第145号)』平成31年4月
- 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 『児童生徒の学習評価の在り方について(報告)』 平成31年1月

(教科教育研修課 小野 修)

